

障害のある人々に対する権利侵害と支援者の労働環境との関連性

—支援者の視点からみた実態把握—

○ 日本赤十字九州国際看護大学 増田 公香 (2284)

キーワード：障害者施設における支援者、労働環境、障害のある人々の権利侵害

1. 研究目的

日本社会において、障害のある人々に対する権利侵害事件は後を絶たない。このような状況を受け、2011年障害者虐待防止法が制定され2012年10月から施行される。

筆者は、障害のある人々の権利侵害に関して、当事者及びその家族の視点から実態把握を行った。注1) しかしながら、その研究の限界性として次の点が考えられた。第一に、権利侵害という事象は被権利侵害者と権利侵害者という両者の関係から生じるが、被権利侵害者と権利侵害者との間に存在が推測される認識・意識の誤差を確認することができなかった。第二に、障害のある人々の支援に携わる専門職の意識形成及び彼らを取り巻く環境要因について把握できなかった点である。

以上の点を鑑み、筆者は本研究において障害のある人々の支援に携わる支援者の視点から、権利侵害に対する意識を把握し又彼らを取り巻く労働環境等の実態把握を行った。本発表ではその結果を踏まえ、障害のある人々に対する権利侵害と支援者の労働環境等の関連性について検討することをその目的とする。

2. 研究の視点および方法

a. 研究の視点

障害のある人々に対する権利侵害という事象に対して、全国の障害者施設で支援する支援者の視点から実態把握を行い、彼らを取り巻く環境や労働条件との関連性について検討する。具体的には、1) 労働環境の状況、2) 権利侵害の経験の有無、3) 労働環境に対する満足度の把握、4) 権利侵害と労働環境との関連性、について分析する。

b. 研究方法

1) 調査実施時期：2011年2月26日～3月15日

2) 調査方法：郵送によるアンケート調査で匿名にて回答後直接筆者宛に返送した。

3) 調査対象者：全国の障害者施設のうち施設長の承諾が得られた564施設において直接支援にかかわっている支援者1,713名を対象とした。

4) 質問項目：①基本的属性、②労働環境状況、③権利侵害を行った経験の有無、④労働環境に対する満足度

3. 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり倫理的配慮として以下の点を実施した。第一に、本研究の趣旨

を詳細に説明し、施設長からの承諾が得られた施設に対してのみ実施した。第二に、本研究について事前に調査の趣旨・目的・方法を詳細に文書にて説明し、承諾が得られた対象者のみ調査を実施し匿名で回答してもらった。第三に、対象者から得られた情報はすべて匿名でかつ統計的に処理をした。

4. 研究結果

1) 対象者

全国の障害者施設のうち施設長の承諾が得られた564施設において直接支援にかかわっている支援者1,713名を対象とした。その結果、1,135名から有効回答が得られた(有効回収率66.3%)。

2) 基本的属性

性別は、男性が471名(41.5%)・女性が663名(58.4%)・無回答1名(0.1%)だった。平均年齢は、38.8歳だった。

3) 労働環境

平均就労年数は8.15年で、年間所得は200~300万円台が最も多く全体の31.4%だった。

4) 権利侵害の経験の有無

「利用者を殴ったりたたいたりした経験の有無」に関しては、121名(10.1%)が「ある」と回答し、又「部屋に閉じ込めた経験の有無」に関しては、157名(13.8%)が「ある」と回答した。

5) 労働環境に対する満足度

労働環境全体に対する満足度は946名(83.4%)と高かったが、その一方で労働時間に対しては706名(62.2%)と低かった。

6) 権利侵害と労働環境に対する満足度との関連性

権利侵害と労働環境に対する満足度との関連性については、重回帰分析を用いて分析した。その結果、身体的虐待に関しては性別と労働時間に対する満足度が有意に影響していた。

5. 考察

本研究結果より、障害のある人々に携わる支援という仕事に対して自己成長をしているという極めて前向きな認識をしている結果が確認された一方で、依然かなりのレベルで虐待が発生しているという事実も明らかとなった。また、虐待と支援者の労働環境との関連性があることも確認された。この結果より“支援”という生きた行為の労働について鑑みる際、支援者の労働環境の改善に向けての環境構築は喫緊の課題であると考えられる。

本研究は、平成22年度日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「障害を持つ人々の権利侵害と環境要因との関連性に関する研究:課題番号20530530」の一部として実施した。

注1)増田公香,「加齢する障害を持つ人々の権利侵害に関する研究」(平成18~19年度日本学術振興会基盤研究(C))
成果報告書,2008年